

## 平安・鎌倉期における十二神将の受容と造像

濱田 沙矢佳

### はじめに

本稿筆者はかつて本誌において、若狭地方の古刹として知られる福井・明通寺伝来の十二神将立像に関する報告を行った（以下、「前稿」。凶版は前稿を参照<sup>①</sup>）。この十二神将立像は、明通寺本尊薬師如来坐像、及び降三世明王立像、深沙大将立像（いずれも平安時代後期〔十一世紀〕、重要文化財）の三軀とともに本堂に安置されているものの、従来あまり注目されてこなかった作例である。前稿では明通寺像の基礎データを報告するとともに、作風等の検討から十三世紀後半頃の作例と位置付け、十二神将像の中世に遡る当初像一具が揃う貴重な作例であることを指摘した。またその制作年代が明通寺の中世再興期における本堂建立の時期と合致することから、明通寺像はそれに伴い、本尊薬師如来坐像の眷属像として新たに加えられたと考察した。さらに、十二神将に言及する明通寺文書の検討から、中世の明通寺において、十二神将が本尊薬師如来に帰依する人々

を守護する存在と位置付けられ、受容されていたことを明らかにした。

さて明通寺像の造像事情において重要な問題は、平安時代以来の本尊薬師如来像に対して、鎌倉時代に新たに十二神将像が加えられたことにある。前稿で見通しを示したように<sup>②</sup>、このことは十二神将に対する期待が中世に改めて高まったことを反映していると考えられるからである。そして十二神将への期待の高まりは、明通寺という一寺院に限らずより普遍的な現象であった可能性が高く、さらに、当時の薬師信仰のあり方も関わる重要な問題と考えられる。

その理由は以下のようなことによる。第一に、十二神将像の彫刻作例を通覧すると、平安時代前期までは独立した彫像としての現存作例がわずかであったものの、平安時代後期以降、急激に造像例が増えており、中には明通寺像のように、古い薬師如来像に十二神将像をわざわざ付け加える作例もみられること、第二に、本来薬師經典には典拠がない十二支との習合現象が生じ、十二支の標幟をあらわす十二神将像が多くなるのもこの時期であること、第三に、平安

時代後期から鎌倉時代に成立した図像集や事相書には、十二神将について充実した説が説かれるようになってきていることである。本稿では明通寺像の研究を出発点にしつつ、これらの現象に着目することで、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、十二神将がどのような状況下で次第に重視され、造像例が増加するに至ったのか、その過程を考察したい。

## 一、対象作例の確認

まず検討対象となる作例の確認から始めたい。<sup>③</sup> 制作年代が鎌倉時代までのもので（後世の再興像を含む）、独立した彫刻作例としてあらわされた十二神将像、及び彫刻作例に付属する台座や光背に十二神将が表現された作例を対象とし、先行研究により本稿筆者が確認し得たものを表1に示した。これにより作例の傾向を概観したい。

平安時代前期、十世紀までの時期については、奈良・新薬師寺像と滋賀・鶏足寺像、奈良・川原寺像が独立した十二神将彫像としては例外的な古例であることが確認される。この時期のこれら以外の造像例は、薬師如来像の台座や光背に表される場合が多い。

台座に表されるものとして、奈良・薬師寺金堂像、京都・東寺金堂像、同・仁和寺像（旧仁和寺北院本尊）がある。薬師寺金堂像は、薬師如来坐像の台座四方に浮彫りされる巻髪で下半身に短い裳を着

ける異形の人物像を夜叉とみなし、十二神将（十二薬叉大将）と解釈する説がある。<sup>④</sup> 東寺金堂像は、『東宝記』金堂条によれば台座に十二神将像を配していたようであり、現在の桃山時代の再興像はこれを再現している（図1）。仁和寺像は空海請来像の再興像と考えられており、台座腰部四方に十二神将像を浮彫りする（図2）。

光背に表すものとして、平安時代前期には京都・勝持寺像がある（図3）。護国寺本『諸寺縁起集』に、興福院と唐招提寺金堂の薬師如来像がいずれも光背中に十二神将を表すとあることから、井上稔氏はそうした奈良時代の先行作例を踏まえた配置と解釈している。<sup>⑤</sup> 台座だけでなく、光背に十二神将をあらわす表現も奈良時代以来の古い形式であったようである。

現存作例に拠る限り、平安時代前期までは独立した彫像として十二神将が表現されることは少なかったようであり、台座や光背のモチーフとして表されることが多かったようだ。このことは、言い換えれば、この時代に十二神将は薬師如来の眷属として認知はされていたものの、独立した彫像として必要とされるほどには重視されていなかったことを暗示しているといえよう。

平安時代後期、十一世紀になると、独立した彫像としての十二神将像の作例が増加していく。年代のわかる現存作例では康平七年（一〇六四）の広隆寺像が古く、旧石清水護国寺伝来の兵庫・東山寺像（承徳二年（一一〇九八））が続く。また現存しないものの記録にあら

られるものとして、治安二年（一〇二二）に藤原道長によって寄進されたと伝わる比叡山延暦寺根本中堂像が、平安時代後期に独立した十二神将像の造像が盛んになる現象の最初期に位置付けられる。その後十一世紀から十二世紀にかけての作例が知られるが、十三世紀以降にはさらに急激に作例が増加する。

このように十二神将の造像例は時代によって増減があるが、特に平安時代後期から鎌倉時代にかけて造像例が増加している。そこには当然、この時期に十二神将の造像に対する動機が高まった状況が反映されていると考えられる。ではその動機とは具体的にはどのようなものだったのだろうか。

## 二、造像の動機の検討―古い薬師如来像に十二神将像を付け加える作例に着目して―

### （一）比叡山延暦寺根本中堂像と広隆寺像

平安時代後期に十二神将の造像が増加する、その現象の嚆矢に位置付けられるのは、比叡山延暦寺根本中堂の十二神将像である。同像は、最澄により安置された薬師如来像に眷属として加えられたものであった。それに続く、現存する広隆寺像も、古い薬師如来像に十二神将像を付け足す事例であった。以降の例でも古い薬師如来像の眷属として加えられた事例が、地域や寺院を問わずに多数あるこ

とが注目される。こうした事例の存在自体は先行研究でもすでに指摘されているのだが、その理由についてはあまり検討されていない。本稿で改めてこれに注目したのは、十二神将像を備えない古像へあえてそれを付け加えるというところに、十二神将を造像する強い動機が感じられるからである。この事例を手がかりに、当時、十二神将像にどのような期待が寄せられていったのかを確認したい。

根本中堂の薬師如来像は最澄の時代に遡る像であったが、この像に対し、治安二年（一〇二二）に藤原道長が十二神将像を造立、供養した（『左経記』<sup>6</sup>）。さらにその後、藤原頼通が日光・月光菩薩像を追加安置した。その年代は永承三年（一〇四八）（『九院仏閣抄』、『叡岳要記』<sup>10</sup>）、あるいは永承七年（一〇五二）（『山門堂舎記』、『天台座主記』<sup>12</sup>）と史料により異なるが、井上大樹氏は永承三年発願、永承七年供養との解釈を提示している<sup>13</sup>。

また広隆寺薬師如来像は、霊験像として当時京中の貴賤の信仰を集めていた（『日本紀略』<sup>14</sup>など）。この薬師如来像に対して、康平七年（一〇六四）に日光・月光菩薩像及び十二神将像が加えられた。願主は丹後守藤原資良、導師は法性寺座主仁暹大僧都、仏師は長成法橋と伝えられている（『広隆寺来由記』<sup>15</sup>）。この日光・月光菩薩像及び十二神将像は現存しており、定朝の弟子、仏師長勢の作として知られている。

根本中堂及び広隆寺の薬師如来像に対し、十一世紀にそれぞれ日

光・月光菩薩像及び十二神将像が加えられた理由について、前掲の史料は明確に語らない。しかし先行研究では、この当時、それらの薬師如来像が格別な信仰を集めていたことが動機と考えられている。

まず根本中堂について、井上大樹氏は、根本中堂薬師如来像が平安中・後期に最澄自刻の像として、さらに「像法転時」の救済者として信仰されたことを明らかにしたうえで、藤原道長が十二神将像を、藤原頼通が日光・月光菩薩像を加えたことについて、「像法転時」において根本中堂像への信仰が高まったことによる造像と指摘した。<sup>(16)</sup>

広隆寺に関しては、武笠朗氏が根本中堂の例を踏まえた造像であると指摘し、当時の広隆寺靈験薬師像に対する信仰の高まりを受けて、願主藤原資良が、自身と近い関係にあった藤原頼通や、頼通の娘で後冷泉天皇皇后の寛子に関わる病氣平癒祈願のために造像したと考察した。<sup>(17)</sup> また松浦正昭氏も、「靈験ある薬師仏に対する当時の特別な信仰」を日光・月光菩薩像と十二神将像の造像の動機と想定した。<sup>(18)</sup>

ここでみたように、二つの例について共通するのは、それぞれ特定の薬師如来像への信仰が盛んになるのに伴い、薬師如来の救済や利益を願って、その薬師如来像のもとに貴顕が十二神将像を造立安置している構図である。薬師如来の利益を願ったり、結縁したりす

る手段として、十二神将像の造像安置がなされていることにまずは注目しておきたい。

## (二) 鎌倉時代の作例

鎌倉時代になり、平安期の薬師如来像に新たに十二神将像が付け加えられる事例が増加する。前稿で紹介した明通寺像もその一例であった。先述の通り、こうした事例が多いことについては先行研究でも度々指摘があるもの<sup>(19)</sup>、その動機については具体的に検討される機会が少ない。例えば濱名徳順氏が千葉・東明寺の十二神将像について、同寺周辺地域が平安時代後期から鎌倉時代後期まで一貫して上総氏系天羽氏の支配下にあったことから、「先祖の造立した本尊に、十二神将を付加して氏寺の莊嚴を高めた」と指摘したことがある。<sup>(20)</sup>

平安期の薬師如来像で当初より十二神将像を備える作例は少ない。濱名氏の指摘を参考にすれば、そうした古来の薬師如来像を必要あって莊嚴する際に十二神将が付加されたとみられるわけだが、こうした経緯がより具体的に想定できる作例がある。それが京都・浄瑠璃寺旧藏像と奈良・靈山寺像である。

浄瑠璃寺の薬師如来坐像は現在同寺三重塔に安置されているが、永承二年(一〇四七)の同寺創建時からの本尊と考えられている<sup>(21)</sup>。それに付随したと伝わる十二神将像(図4)が現在東京国立博物館

と静嘉堂文庫美術館に分蔵されており、平成二十五年からの解体修理に伴い発見された墨書により、安貞二年（一二二八）頃の作と確認されている。藤岡穰氏や瀬谷貴之氏は、本十二神将像の造像の契機として、浄瑠璃寺の根本史料である『浄瑠璃寺流記事』において、建暦二年（一二二二）に薬師如来像に御帳を懸けたとあることに着目した<sup>(22)</sup>。また富島義幸氏は、浄瑠璃寺に現存する薬師如来像所用厨子の当初部分が鎌倉時代前期までさかのぼると判断したうえで、薬師如来像はこの厨子に納められており、建暦二年にそこに御帳が懸けられたと解釈した<sup>(23)</sup>。鎌倉時代前期の浄瑠璃寺において薬師如来像に対する荘厳が行われたことが跡付けられるのであるが、創建以来の本尊であった薬師如来像がこの時代に改めて重視されたことが、十二神将像が加えられる契機となったと考えられる。

また霊山寺薬師三尊像<sup>(24)</sup>は、中尊像納入紙片の年紀から治暦二年（一〇六六）の作であることが知られている。現在この三尊像は、弘安六年（一二八三）上棟の本堂に、同八年（一二八五）造立の春日厨子に納めて祀られている。その眷属の十二神将像は鎌倉時代末期の作と考えられており、薬師三尊像厨子の左右に六体ずつ安置されている（図5）。十二神将像の造像は、十三世紀後半に古来の薬師三尊像を祀るための本堂や厨子が整備されるのに伴い、その一環として行われたと考えられる。

ところで霊山寺薬師三尊像は像本体と同時期の板光背を備えてい

るが、両脇侍像分の光背には十二神将が絵画で描かれている。つまり霊山寺の三尊像には当初より眷属として十二神将も表現されていたが、鎌倉時代に、さらに彫像の十二神将像が付け足されたのである。薬師如来を改めて祀るのにあたり、十二神将像を造像して付けることへの強いこだわりが感じ取れる。

先に確認したように、十二神将を備えない古来の薬師如来像に対し、それを付加する現象は、平安時代に特別な信仰を集めた像に関して既にみられた。この現象は中世に至り、より一般的な広がりを見せるようである。中世には薬師如来像一般について、眷属としての十二神将像が不可欠なものとして認識され、古来の薬師如来像が改めて注目された場合には、それを荘厳するにあたり十二神将像の不在が大きな問題となり、十二神将像が付加されたと考えられるのである。薬師如来像と結縁したり、願いを向けたりする手段として十二神将像の造像安置を選択するという構図は、平安時代後期の事例と同様のものである。

ここで想起されるのは、神奈川・曹源寺十二神将像に関する一連の指摘である。浅見龍介氏は、曹源寺像のうち巳神像（図6）がやや大きめで若々しい武将の姿であることに注目し、発願者が巳年生まれである可能性を指摘した<sup>(26)</sup>。それを受けて奥健夫氏は、十二神将は年よりも十二時の守護神として信仰されたとし、曹源寺巳神像の表現は、巳刻生まれの源実朝の無事出生を助けた守護神としての特

別な性格が与えられていることによると指摘した。そしてその原型を、実朝出産を控えた北条政子による発願と想定される永福寺薬師堂の十二神将像に求めた<sup>27)</sup>。実朝の無事出生はあくまでも薬師如来への願いであろうが、奥氏の指摘に従えば、巳神はその願いを託され成就させた存在と解されよう。十二神将は薬師如来への願いを媒介するとともに、薬師如来の利益を礼拝者にもたらすという観念がここに読み取れる。

### (三) 小結

本稿筆者は前稿において、明通寺十二神将像が同寺本尊薬師如来像に帰依する人々を守護する存在と観念されていたとの見通しを示した。この見通しに基づき、作例の検討から次のことを導いた。

・ 十二神将の造像は平安時代後期から鎌倉時代に広がりを見せる。その中に、古来の薬師如来像にあえて十二神将像を付け加える例がある。ここに、平安時代後期以降になってから改めて十二神将が注目を集めたことが示唆されている。

・ この期待の高まりの契機は、靈驗薬師、古来の由緒ある薬師如来像への信仰にあるとみられる。薬師如来の利益を享受したり、薬師如来と結縁する手段として、十二神将の造像、安置が選択された。

・ 十二神将には、薬師如来の礼拝者を守護したり、礼拝者の祈願を薬師如来へ媒介したりするなど、人と薬師如来をつなぐ役割が期待されていた。

平安時代後期、十二神将が人々と薬師如来をつなぐ存在であったことは、特定の作例に限らず普遍的であったとみてよい。その初期の事例である比叡山根本中堂や広隆寺でも、あくまで靈驗薬師への信仰の高まりから十二神将像が付け加えられたのであった。薬師如来へ願いを向け、結縁するために、十二神将の造像安置が相応しい手段とみなされたのである。そしてそのような認識は以降の時代においても同様であり、十二神将への期待はいよいよ増し、多彩な作例が造像されるに至ったのである。

### 三、平安時代後期から鎌倉時代における十二神将への期待と理解

#### (一) 問題の所在—薬師經典が語らないこと—

前章では、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、靈驗薬師への信仰を契機に、人と薬師如来をつなぐという十二神将の役割が注目され、造像が盛んになったことを指摘した。ただしここに一つ大きな問題がある。薬師經典には造像の参考となるような十二神将の具体

的な姿や性格は示されていないことである。それにも拘らず当時の人々は、なぜこの時代に改めて十二神将に期待を寄せ、そして何を頼りに造像したのだろうか。

この時期には、十二神将の造像が活発になると軌を一にして、その姿や性格を規定するような様々な現象が起こっている。それは主に、十二支との習合、形像の成立、時や方位の守護者としての信仰、密教的意義付けの四点である。本章ではこれを取り上げ、十二神将への期待が高まり、理解が定まっていく様子を見ていきたい。

その前提として、十二神将の教義上の典拠である薬師經典の内容を確認する。『薬師琉璃光如来本願功德経』などの薬師經典では、十二神将は、釈迦が薬師如来の本願功德を説く説法場に登場し、釈迦の説法を聞き終わると、それぞれ七千の葉叉を眷属として従えて同時に声を挙げ、仏法僧に帰依して一切の有情のために利益をなすことを釈迦に誓う。そして、どのような場所にも従い、もし薬師經典を流布し、あるいは薬師如来の名号を受持して恭敬し供養する者があれば、その人を衛護して一切の苦難を逃れさせ、あらゆる願いを満足させるといい、あるいは疫病から免れることを求める者は、薬師經典を誦誦し、五色の糸で十二神将の名字を結ぶべきことを説く。<sup>(28)</sup> すなわち十二神将は教義上、仏法僧に帰依して衆生に利益を与える存在であり、なかでも薬師經典を流布し、薬師如来を供養する者を守護する存在と位置付けられている。

#### 平安・鎌倉期における十二神将の受容と造像

薬師如来を供養する人を守護するという、薬師如来と人をつなぐ基本的な役割は、經典ですでに述べられている。ただし、薬師經典では十二神将それぞれの名前を列挙するものの、各神将の個別の性格や、具体的な役割などは説いていない。またその像容についても示されていない。平安時代前期までの造像例がわずかなのはそのためだろう。しかし、ここから性格や像容に関する規定が様々に加わっていくこととなる。

#### (二) 中国・朝鮮半島における十二神将造像

薬師經典には十二神将の像容に関する規定はないが、中国や朝鮮半島では、十二神将はどのように表されていたのだろうか。日本で造像が盛んになる前段階の状況として確認しておきたい。

中国での造像については中野照男氏の著作に詳しく、以下それを参考にしながら述べる。<sup>(29)</sup> 中国では、敦煌莫高窟の薬師浄土变相図に十二神将像が確認されている。ただし隋代(五八一―六一九)の作例では、その像容は天人形や菩薩形などで武将の姿ではなく、定型化されていない。武将形の十二神将像は初唐(六一八―七一二)から現れ、同時に十二支に類する獣面をいただく神将形もあらわされるようになった。貞観十六年(六四二)の題記がある敦煌莫高窟第二二〇窟北壁の薬師浄土变相図がその最古例とされている。<sup>(30)</sup> その後、盛唐期(七一三―七六六)以降に着甲の神将形としての姿が定型化

された。それは宝冠あるいは兜を被り、跪き、多くは合掌する姿であるといひ、西夏期（十一世紀）頃までの作例が知られている。敦煌莫高窟以外でも、石窟に伝来した薬師浄土变相図や浮彫像で十世紀頃の造像例が知られている。ただ、こうした中国での造像例が日本にどのような影響を与えたかは詳らかではない。

一方朝鮮半島では、従来、十二神将像が確認できるのは高麗時代（九一八—一三九二）以降と考えられてきた。しかし、李鎮榮氏の一連の研究により、統一新羅時代（六六八—九三五）に十二神将が造形化されていた可能性が提示され、この時代には、着甲し武器を手に取る神将像と、着甲して武器を持ち岩座に立つ獸頭人身像がそれぞれ十二神将として造像されていたことが指摘された<sup>31</sup>。従来朝鮮半島では十二支像とみなされてきた獸頭人身像の作例の中に十二神将像が含まれる可能性が示されるとともに、統一新羅時代の十二神将像が日本における初期の造像に影響を与えたことが想定されるようになったのである。

### （三）日本における十二支との習合と作例の増加

日本では、現存する十二神将像は着甲の神将像が一般的である。さらに頭上には十二支獸の標幟が表されている場合が多く、現在ではこれが十二神将像の表現の大きな特徴となっている。だがこれも元からではなく、平安時代前期までの作例には十二支獸の標幟は表

されない。日本で十二神将像に十二支の標幟が表されるようになったのは、平安時代中期から後期と考えられている。根本中堂像は『九院仏閣抄』<sup>33</sup>の記述から十二支獸の標幟がなかったものとみられ、現存する広隆寺像にもない。彫刻作例では、兵庫・東山寺像（承徳二年〔一〇九八〕）や東大寺像（十二世紀）が十二支をあらわす十二神将像の古例とされており、それ以降、十二支獸の標幟を頭上にあらわすものが多くなる。

十二神将と十二支獸との関係は薬師經典には説かれていないが、十二という数の一致から結びつくことになったようだ。両者を結びつけた教義上の根拠の一つと考えられているのが『大方等大集經』<sup>34</sup>である。『大方等大集經』卷第二十三淨目品は、閻浮提の南方の海中にある琉璃山に毒蛇、馬、羊が、西方の海中の頗梨山に彌猴、鶏、犬が、北方の海中の銀山に猪、鼠、牛が、そして東方の海中の金山に師子、兔、龍がそれぞれおり、この十二獸が一獸ごとに交代で閻浮提に行き、遊行教化していると説いており、この十二獸が十二神将と結びつけられたと考えられている。また、中国の陰陽道の十二支の影響も指摘されている。十二支は本来方位や時刻を表す概念であったが、中国でそれに十二種類の動物が配当されるようになったものである<sup>36</sup>。

日本において十二神将と十二支が結びついたことには、前節でも確認したような中国や朝鮮半島からの影響がまずは想定されるが、



宿曜道や陰陽道の影響も考えられているように、複雑な要因が関わっているようである。その経緯を明確にするのは現段階では難しい。

経軌類で十二神将と十二支との関係を説く唯一のものとされているのが、日本で平安時代中期以前に成立した台密系の経軌と考えられている『浄瑠璃浄土標』である。本書に十二支の獣座に載る十二神将の像容が説かれていることから、この頃までには十二神将と十二支は習合していたのであろう。<sup>38</sup>ただし、これを典拠とした絵画や彫刻の実際の作例はほぼ知られていない。<sup>39</sup>日本における十二神将と十二支獣の結びつきは平安時代中期に想定されるとはいえ、実際の造像に反映されるのは先述のとおりもう少し後になるようだ。鎌倉時代以降になると両者の結びつきは確固たるものとなり、十二支獣が持つ性格やイメージが、しばしば十二神将像本体の表現にも反映されるようになる。<sup>40</sup>そこに至るには、十二神将の像容がその時代までに確立したことが大きいと思われるので、次節ではその経緯を検討したい。

#### (四) 形象の成立と伝わり

十二神将の形象について薬師經典には規定がない。それを説く経軌としては、前掲の『浄瑠璃浄土標』と、元の沙囉巴(一一二五九—一三二四)訳『薬師琉璃光王七仏本願功德念誦儀軌供養法』があ

平安・鎌倉期における十二神将の受容と造像

る。しかし、これらに基づく作例は知られていない。

經典等による規定がなかったため、十二神将像の造像に際してはそれに関わる僧侶や仏師、願主に委ねられたと考えられるが、十二神将彫像の作例が増え始めた頃から、先行作例に基づく伝統的な図像が範とされる場合があったことが知られている。例えば、興福寺の板彫十二神将像のうち矢をつまよる頰備羅は、新薬師寺の頰備羅と同じ形であり、広隆寺の安底羅像もそれに近い。<sup>43</sup>広隆寺像は新薬師寺像と形制が似たものが多いことから、影響関係にあると考えられている。<sup>44</sup>他にも、十二神将像の代表的な作例に共通して認められる姿勢が複数あることが上杉孝良氏により指摘されている。<sup>45</sup>

そうした状況の中、十一世紀頃には、典拠とした経軌は不明ながら、ほぼ同一形態にある十二神将図像が規範として広く流通したことが知られている。それが、「定智本」(旧益田家本、旧高山寺本、玄証本)と呼ばれる図像と、「世流布像」と通称される図像である。<sup>46</sup>いずれも頭上には十二支獣の標幟をあらわす。

「定智本」は現在メトロポリタン美術館などに分蔵され、卯神像の裏書及び付属する別紙の墨書の内容から、長寛二年(一一六四)に絵仏師定智が唐本を写し、高野山月上院の玄証(一一四六—一一二二)が所持したと解釈されているものである。

「世流布像」は、その図様は若干の差異はあるものの定智本とほぼ同じで、それを簡略化したものである。文治五年(一一八九)撰

集の『覚禪鈔』『薬師法』に掲載され、そこに「世流布像（円心様、未見<sup>46</sup>本文。井天本珍海写<sup>47</sup>之以<sup>48</sup>件本<sup>49</sup>之。」とあることから、円心様の図像でその像法を説く経軌は不明であるが、『覚禪鈔』所収の図は「井天本」を珍海が写したものにより描かれたと解釈されている。<sup>48</sup>「世流布像」の通称から、『覚禪鈔』編纂の頃に流行していた図像と考えられている。円心は十一世紀中頃に活躍した画僧であり、珍海（一〇九一—一一五二）は東大寺の已講で、画技と図像に優れた人物であったという。<sup>50</sup>「世流布像」の成立について、伊東史朗氏は、「円心様」の注記から円心の図像が契機となったもので、十二支獣を戴く初期の例として著名だったものと推定し、川瀬由照氏は円心独自のものとの断定は避けながらも、十一世紀頃にはじまり、あるいは南都周辺より流行った図像かとしている。<sup>51</sup>

「定智本」や「世流布像」の系統の図像による代表的な作例として、彫刻では神奈川・宝城坊本堂十二神将像（平安時代後期、十二世紀）、個人蔵の板彫十二神将像（鎌倉時代、十三—十四世紀）、絵画では和歌山・桜池院薬師十二神将像（鎌倉時代、十三世紀）が知られている。また、彫刻作例で群像のうち一部がこの系統の図像に基づくと考えられているものに奈良・興福寺東金堂像、京都・浄瑠璃寺旧蔵像などがあり、平安時代後期から鎌倉時代の十二神将造像において広く受容されたことが知られる。

「定智本」と「世流布像」の祖本や、図像の継承の過程、両者の

関係などについては諸説があるが、本稿ではその詳細については立ち入らない。ただし、「定智本」や「世流布像」に含まれる図像が、それに先立つ玄朝様の図像（興福寺板彫像）や、広隆寺十二神将像に既に見られることが指摘されている点に注目したい。以上により、具体的な像法がなかった十二神将に関して、実際の造像を通して図像が形成されていったとみられること、その中から、規範となる図像が十一世紀頃に現れたらしいこと、その後、鎌倉時代にかけてその図像が広く受容され、それに基づく造像が盛んに行われたことが想定されるのである。またこの事象が、十二支獣を戴く十二神将像が作られるようになった時期と重なることも重要である。

鎌倉時代には、十二神将像の形像はさらに多様に展開した。この時期にも、平安時代後期同様に新薬師寺像やそれに類する奈良時代作例に基づく図像を取り入れたもののほか、不動明王の眷属である制吒迦童子像や、二天王、毘沙門天、金剛力士などの図像の転用が指摘される作例もあり、<sup>56</sup>様々な図像を積極的に取り入れながら十二神将像が構成されたことが明らかにされている。

また、鎌倉地方を中心に受容された一つの十二神将図像が注目されている。神奈川・覚園寺像、同・鎌倉国宝館像（旧辻薬師堂像）、奈良国立博物館像（旧神奈川・太寧寺像）などがその図像による代表的な作例であり、北条義時が建保六年（一一二八）に建立した大倉薬師堂の十二神将像が典拠と考えられている。<sup>57</sup>この図像の十二神

将像が多く作られた理由として、大倉薬師堂像が靈験仏として信仰されたために模刻像が作られたとする瀬谷貴之氏の説<sup>58</sup>や、大倉薬師堂は北条氏が鎌倉に建立した最初の寺院として重要な由緒を有したことから、そこに祀られた十二神将像が以後の造像に影響を与えたとする塩澤寛樹氏の説<sup>59</sup>がある。新たな政治文化の中心地となった鎌倉で、従来の規範とは別に、鎌倉幕府有力者の北条氏ゆかりの十二神将像の図像が特別な意味を伴う規範となり、その周辺地域で広く受容されたのである。

平安時代末から鎌倉時代にかけては、台密、東密それぞれの図像集で十二神将の多彩な図像が教義的に集約されていく。台密では『阿婆縛抄』(十三世紀)で、『浄瑠璃浄土標』の説と、『妙見菩薩神呪経』に基づく獸頭人身の十二支神像の像容の二説を併記している<sup>60</sup>。さらに『阿婆縛抄』には

禾云。凡世間流布形像様々也。或頭冠上各戴<sup>二</sup>当獸<sup>一</sup>。或各乘<sup>二</sup>当獸<sup>一</sup>。有<sup>二</sup>一眷属<sup>一</sup>。獸頭人身。執<sup>二</sup>器械<sup>一</sup>。或踏<sup>二</sup>時教獸<sup>一</sup>。謂<sup>二</sup>午神踏<sup>三</sup>九馬<sup>一</sup>。未神踏<sup>三</sup>八羊<sup>一</sup>。〔已下准<sup>レ</sup>之〕也。<sup>61</sup>

とあり、先の二説以外にも、頭上に十二支獸を載せるものや時の数の獸を踏むものなど、十二支獸を伴う様々な十二神将の形像が流布していたことを示唆している。

平安・鎌倉期における十二神将の受容と造像

東密では、十二世紀の『図像集』<sup>62</sup>に『妙見菩薩神呪経』の十二支神の姿が十二神将像の形像として引用され、以後、『覚禪鈔』、鎌倉時代後期の『白宝抄』<sup>64</sup>や『白宝口鈔』<sup>65</sup>などには多様な十二神将の像容が説かれている<sup>66</sup>。それらに説かれる十二神将の像容は、十二支神像や「世流布像」、『浄瑠璃浄土標』による像、頭上に十二支を載せる像など、多様な姿を示している。

ここで検討した内容から、そもそも薬師經典には規定がなかった十二神将の像容に関して、平安時代後期から鎌倉時代には、実際の造像や信仰を通して、あるいは図像集における教義的な検討を通して、様々な説が展開していたことが分かる。ただし、図像集に記載されていないも、現存する十二神将像の作例には見られないものもあり、必ずしも様々な説のすべてが実際の造像と結びついていたわけではないようだ。しかしそうであるにせよ、それらの多彩な図像は、この当時、十二神将がいかなる姿をしているかということに関心が寄せられた状況を反映しているのは間違いない。また図像集に示される十二神将の図像が、その像容は様々であるものの、多くが十二支と関わる姿で表現されている点も重要である。この時点で、十二神将の姿を規定するのに十二支が不可欠とみなされていることがここからも分かる。

(五) 時や方位の守護者としての信仰

十二神将と十二支獸との結びつきが確固となることにより、十二神将にはさらに重要な性格が加わった。それが、十二獸が本来持つ十二の時と方位に関わる性格である。

まず時に関わる性格について、先述のとおり十二神将と十二支獸を結びつけた教義上の典拠は『大方等大集經』とみられ、中野照男氏は、これにより十二獸がもつ十二時、十二日、十二月を司る守護神の性格を十二神将が引き継いだと指摘しているが、その後の日本における経緯を確認しておく。

十二神将が特に時と結びつけられたことを示す史料として、興然(一一二〇—一一三三)の『四卷』第三薬師法には、

十二神将非<sub>レ</sub>眷属<sub>レ</sub>分身也。十二時分<sub>レ</sub>形守護給也。<sup>(68)</sup>

とある。十二神将は薬師如来の眷属ではなく分身であり、十二時に形を分けて守護するという。また、頼瑜(一二二六—一三〇四)の『薄草子口決』には

十二神将擁<sub>レ</sub>護<sub>レ</sub>十二時<sub>レ</sub>之夜又也。頂戴<sub>レ</sub>十二時獸<sub>レ</sub>。<sup>(69)</sup>

とある。奥健夫氏は本史料に基づき、十二神将の十二時の守護神と

しての性格を強調した。<sup>(70)</sup>それを踏まえ、ここでは特に、本史料では十二神将が頭上に載せる十二支獸が「十二時の獸」と解釈されていること、さらにそれが十二時を擁護する十二神将の働きと結びつけて説明されていることに注目しておきたい。また『白宝口抄』巻第十三、薬師法第二には、

即此十二神将又為<sub>レ</sub>助<sub>レ</sub>薬師十二大願<sub>レ</sub>。仏菩薩成<sub>レ</sub>十二神<sub>レ</sub>。經<sub>レ</sub>十二時十二日十二月<sub>レ</sub>。昼夜不断守<sub>レ</sub>護衆生<sub>レ</sub>也。<sup>(71)</sup>

とある。十二神将は、薬師十二大願を助けるために仏菩薩が変じたものであり、十二の時、十二の日、十二月の月を経て、昼夜不断に衆生を守護とする。

薬師如来を供養する者を護ることは、薬師經典が説く十二神将の基本的な役割であるが、ここにみたように、十二支獸と結びつき十二の時と関わる性格を持つようになったことで、十二神将は仏の化身として、昼夜絶えず衆生を守護する存在として期待されるようになった。ところで、『別尊雜記』に引用される薬師法の表白には次のようにある。

於<sub>レ</sub>内證<sub>レ</sub>十二之神王前後鎮持<sub>レ</sub>守持誦四衆<sub>レ</sub>。於<sub>レ</sub>外現<sub>レ</sub>八万夜<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>。又随<sub>レ</sub>各将<sub>レ</sub>每時廻<sub>レ</sub>千界有情<sub>レ</sub>領<sub>レ</sub>利益<sub>レ</sub>每日進<sub>レ</sub>国土<sub>レ</sub>。<sup>(72)</sup>

内においては十二神将が前後に鎮まり、薬師經典を持誦する四衆を守ることを明らかにし、外においてはその眷属である八万の夜叉を現す。また、各将に随い時ごとに大千世界の有情をめぐり、利益をおさめて毎日国土を進むとする。十二神将が八万の夜叉を従え、時ごとに衆生のもとを巡るといふ、法会の中で読み上げられたであろうこの壮大な光景は、聴聞する者の十二神将への期待を一層高めたに違いない。

次に、方位に関わる性格について、十二支がそもそも方位とも関わる概念であることから、それと結びついた十二神将もまた方位と関連するようになった。ここで注目されるのが、向坂卓也氏による神奈川・称名寺所蔵十二神将画像に関する研究である。<sup>(73)</sup>本図は十二神将の各像を十二幅に分けて描いた類例のない作例である。向坂氏は、本図の表現には季節の循環や方位が強く意識されていることを明らかにしたうえで、本図が称名寺灌頂堂に備えられていたこと、当初から薬師如来像を伴わなかったことを史料から指摘し、本図が方位の守護神として制作された可能性を論じた。そもそも薬師如来を信仰する者の守護者であり、その眷属として表現されてきた十二神将は、ここに至り、薬師如来から切り離され、方位の守護神として独自の信仰を得るまでに重視されるようになったのである。

#### (六) 密教的意義付け

ここまで、平安時代後期以降に十二神将の画像や、時や方位の守護者としての性格が定まっていたことを、主に密教の画像集や事相書により確認してきた。ただし、画像集や事相書により言及されているのはそれだけではない。

金子啓明氏は、十二世紀以降の事相書において、本来顕教の尊格である十二神将が密教事相家の手によって改めて意義付けられ、密教的体系に組み込まれたと指摘した。その一例として『覚禪鈔』巻三薬師法の項に「十二神将事」の一章が設けられ、本縁・住所・本地・形像の項目を立てて十二神将の意義付けが行われていることを挙げ、その所説は『阿婆縛抄』等にも引き継がれていると述べた。<sup>(74)</sup>

十二神将に関する密教の立場からの意義付けは、他にも様々に認められる。例えば『行林』<sup>(75)</sup>、『阿婆縛抄』<sup>(76)</sup>、『白宝抄』<sup>(77)</sup>、『白宝口鈔』<sup>(78)</sup>では、十二神将の形像や配置など実際の造像にも関わる内容のほか、種子や名号、十二支や本地仏との対応関係、住所など十二神将の教義的な意義付けに関わる事項、さらには行法に関する事柄など、様々な項目により十二神将を説明している。それらを通して、十二神将の性格が具体的に規定されていった。

ところで、『別尊雜記』、『阿婆縛抄』、『白宝抄』は十二神将呪の効能として『陀羅尼集経』の次の記述を引用している。

若有「受持」。能拔「身中過去生死一切重罪」。不「復經」歷三塗。「免」離九橫「超」越衆苦。「十方世界隨處安樂自在無礙」。

これは、薬師琉璃光仏大陀羅尼呪の機能を説いた記述である。この陀羅尼に十二神将の名が列挙されるため、十二神将呪とも理解されたようだ<sup>80)</sup>。これによると、この呪を受持すれば、よく身中の過去の生死の一切の重罪を消し、また地獄、餓鬼、畜生の三悪道をめぐることなく、九横を免れ、あらゆる苦を超越し、十方世界の至る所で心身に苦痛がなく（安楽）、束縛がなく心のままであり（自在）、とらわれがなく自由自在である（無礙）という。先述のとおり薬師經典では、十二神将は有情に利益を与えること、薬師經典を流布し薬師如来の名号を受持して供養する者を守護することが説かれるのみであった。それに対してここでは、『陀羅尼集経』が説く陀羅尼を引用し、十二神将を供養することによる効能がより詳細に示され、十二神将の衆生と関わる役割についても関心が寄せられているのである。

### (七) 小結

今一度、ここまで検討したことをまとめておく。

十二神将は本来薬師經典にはその像容や具体的な性格が説かれておらず、そのためか平安時代前期までは独立した造像例はわずかで

あった。平安時代後期に独立像としての造像例が増えたことの発端は、靈驗薬師への信仰の高まりに求められる。古来の由緒ある薬師如来像と結縁し、その救済や利益を受けるために相応しい存在として、薬師如来の信仰者を守護する十二神将が改めて注目されたのだらう。

十二神将が注目され、造像例が増加するのと軌を一にして、平安時代後期から鎌倉時代には、十二神将の像容や性格が次第に詳しく規定されるようになった。最も重要なものが十二支との習合であり、日本においては平安時代後期から両者の結びつきが密接なものとなる。図像集には十二支とかかわる様々な図像が収録された。実際の十二神将像にも十二支の標幟があらわされるようになり、さらには十二支獣の性格が像自体の表現に反映された作例も現れるなど、十二支と習合することによって十二神将像の造形はより豊かに展開した。また十二支との習合により、十二神将には十二の時や方位の守護神としての性格が加わり、昼夜絶えず衆生を護る十二神将の性格が確固たるものとなった。十二神将への関心の高まりは平安時代後期以降の事相書にも反映され、種子や名号、本地、形像、住所、行法とその効能に関するなどが整理され、十二神将の教義上の意義付けが行われていった。

## おわりに

本稿では明通寺十二神将像の研究に端を発し、平安時代後期から鎌倉時代にかけての十二神将造像について検討を行った。

平安時代後期から鎌倉時代には、人と薬師をつなぐ十二神将の性格が改めて注目され、それにより、独立した彫像としての十二神将像の造像が盛んになった。それと同時に十二神将への教義的な理解が深められ、薬師経典には規定がなかった像容や性格が詳しく定められていった。そのことが、十二神将像のさらなる造像につながっていったのである。

ところで、教義上の規定に基づく造像には制約が伴うように思われるが、特に中世の十二神将像の作例には各像の個性が際立った、豊かな表情をあらわすものが多い。ここで今一度、これまでに触れてきた十二神将の諸作例を見てみたい。どの像も、生動感のある姿や感情を露わにする顔つきには、威厳のある薬師如来像とは対照的な親しみやすさがある。頭上に載せた動物が、ことさら愛らしい容姿で表現されることが多いのも、そう感じさせる一因であろう。十二神将像は、なぜこのように親しみやすく表現されたのであろうか。従来、中世の十二神将像の表現は、その時代の仏師の創造力の発現と解釈されることが多かったように思われる<sup>(8)</sup>。しかし、信仰対象

平安・鎌倉期における十二神将の受容と造像

として作られた以上、その表現には像を礼拝する人々が十二神将に寄せた期待が反映されていると考えるべきである。本稿で検討したように、中世には、十二神将は薬師如来と衆生とを媒介し、絶えず衆生を守護すると考えられていた。遠い浄土にいる薬師如来とは対照的に、十二神将は衆生にとってより身近な存在と観念されたのである。そして十二神将像は、どの寺院でも一般的に、薬師如来像の周囲の、より礼拝者に近い位置に安置される。様々な表情や身振りをみせるその姿は、礼拝者をひきつけ、薬師如来へのより一層の信仰を促したであろう。十二神将像の豊かな表現には、中世の人が十二神将に寄せた期待や親近感が反映されているのであり、またそこに十二神将像の一番の魅力があると本稿筆者は考えるのである。

### 【注】

- (1) 濱田沙矢佳「福井・明通寺の十二神将立像について」、『美術史学』第四十二号、二〇二一年。
  - (2) 前掲注1拙稿、四十九頁。
  - (3) 十二神将像作例の確認は、次の文献を基本資料として行った。
    - ・久野健編『仏像集成』全八巻、学生社、一九八六—一九九七年。
    - ・中野照男『日本の美術』第三八一号「十二神将像」、至文堂、一九九八年。
    - ・『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代造像銘記篇』一一十六、中央公論美術出版、二〇〇三—二〇二〇年。
- 併せて、十二神将像に関する論文、及び十二神将像が掲載され

た展覧会図録等も参照した。適宜、表1の備考欄に示している。

- (4) 亀田孜「図像として見た薬師如来」(十三頁)、小島章見「薬師寺金堂本尊台座につきて」(十八頁)、いずれも『日本美術工芸』第六〇号(通巻第一一四号)所収、一九四八年。長岡龍作「日本の仏像」、中央公論新社、二〇〇九年、一四〇—一四二頁。

- (5) 「別尊要記第四(心覚)云、金堂中尊薬師(丈六)、光上七仏薬師(三尺)、下十二神将(三尺)、脇士日光月光(八尺云)、(中略)或記云、薬師(石施無畏屈火、左仰掌屈火水)、光七仏同中尊印下十二神将二体ツ、並左右、各三所付之(云、)(藤田經世編『校刊美術史料 寺院篇 中巻』、中央公論美術出版、一九七五年、一九九九年再版、三八八頁。〔内は注、以下同じ〕。

- 東寺金堂像台座の十二神将像については、次の文献で論じられている。根立研介「薬師如来及両脇侍像」解説、東寺創建一千二百年記念出版編纂委員会編『東寺の歴史と美術 新東宝記』、東京美術、一九九五年、一〇二頁、一〇六頁。同「金堂薬師如来像の台座に取り付けられた十二神将像——桃山彫刻の隠れた名作に光をあてる——」、東寺(教王護国寺)宝物館編集・発行『修理完成記念 東寺の十二神将像——モデリングの妙——』、一九九八年初版、二〇〇七年三版、六十五—六十六頁。

- (6) 伊東史朗「仁和寺旧北院本尊薬師如来檀像について」、『仏教芸術』一七七、一九八八年、十一—十五頁。

- (7) 井上一稔「勝持寺薬師如来檀像について(下)」、『博物館学年報』第四十七号、二〇一六年、五十四頁。

- (8) 「天陰不降雨、今晚入道殿率<sub>二</sub>関白殿、并内府、可<sub>レ</sub>然上達部、殿上人、諸大夫等<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>登山<sub>一</sub>給、是明日供<sub>二</sub>養御願造立十二神誠<sub>一</sub>」(講師権少僧都永昭、件人興福寺僧也)、『左経記』治安二年十一

月二十三日、「増補史料大成」六、一二八—一二九頁)

- (9) 「日光菩薩像一軀。(立高五尺。金色。永承三年。宇治関白左大臣頼通所<sub>二</sub>造立<sub>一</sub>也。)

月光菩薩像一軀。(同上。)(『群書類従』第二十四輯釈家部、五七〇頁)

- (10) 「日光月光像。(竝立高五尺。金色。)

願主関白左大臣頼通。(永承三年。)(『群書類従』第二十四輯釈家部、五一〇頁)

- (11) 「日光月光菩薩像各一軀。(竝立高五尺。)

件像者。檢按関白(頼通。宇治殿。)所<sub>二</sub>造立<sub>一</sub>也。永承七年十二月廿三日開眼供養。導師座主源心西明房。(『群書類従』第二十

- (12) 「同七年(壬辰)十二月廿三日檢按関白奉<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>日光月光<sub>一</sub>菩薩

像。安置根本中堂。令<sub>二</sub>和尚開<sub>二</sub>眼<sub>一</sub>之」(『統群書類従』第四輯下補任部、五八六頁)

- (13) 井上大樹「平安時代中・後期における薬師如来信仰とその造像に

関する研究」、『鹿島美術研究(年報第二十五号別冊)』、二〇〇八年、二五五—二五六頁。

- (14) 「五日庚寅。東西京貴賤拳首參<sub>二</sub>広隆寺<sub>一</sub>。人云。寅年五月五日庚

寅日。薬師如来奉<sub>二</sub>安置<sub>二</sub>此堂<sub>一</sub>之故也。)(『日本紀略』後編十二、三条天皇長和三年五月。『国史大系』第五卷、一九一五頁)

- (15) 「日光菩薩。月光菩薩。十二神将像。

此諸尊者。後冷泉院御宇康平七年(甲辰)。丹後守藤原資良。依<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>願造焉<sub>一</sub>供<sub>二</sub>養諸尊<sub>一</sub>。導師法性寺座主仁暹大僧都。造<sub>二</sub>諸尊像<sub>一</sub>。仏工長成法橋也。此菩薩十二神将。靈驗奇特不可思議也。)(『群書類従』第二十四輯釈家部、一九一頁)



- (16) 前掲注13、井上氏論文、二五三―二五六頁。
- (17) 武笠朗「長勢作 十二神將立像」、『週刊朝日百科 日本の国宝』一五 京都広隆寺、朝日新聞社、一九九七年、一四七―一四八頁。  
同「仏師長勢——円派仏師研究(二)——」、『実践女子大学美術学 美術史学』第三十四号、二〇二〇年、二五―二六頁。
- (18) 松浦正昭「十二神將立像」、松島健監修・長岡龍作責任編集『極美の国宝 仏 国宝 広隆寺の仏像(下巻) 第九冊 解説』、同朋舎メディアプラン、二〇〇二年、四十三頁。
- (19) 次の文献で指摘されている。  
・向坂卓也「コラム 城ヶ島薬師堂と見桃寺の十二神將像」、神奈川県立金沢文庫編『特別展 十二神將——守護神集結——』、同館、二〇〇四年、十五頁。  
・山口隆介「十四 十二神將立像 二軀(十二軀のうち) 宝城坊」作品解説、鎌倉国宝館編『旧辻薬師堂諸像修理完成記念 特別展 薬師如来と十二神將「いやしのみほとけたち」』、同館、二〇一〇年、一〇八頁。  
・濱名徳順「富津市東明寺十二神將像と北条義時の戌神靈験譚」、『アジア民族造形学会誌』第十八号、二〇二二年、三十七頁の注四十三。
- (20) 前掲注19、濱名氏論文、三十七頁。
- (21) 深沢麻亜沙「浄瑠璃寺薬師如来像と平安後期の南山城の宗教空間」、『美術史学』第三十三号、二〇二二年、八十一頁。
- (22) 藤岡穰「解脱房貞慶と興福寺の鎌倉復興」、『学叢』第二十四号、二〇〇二年、十六頁。瀬谷貴之「二 重文 十二神將像のうち 二軀 鎌倉時代 東京国立博物館」作品解説、前掲注19、神奈川県立金沢文庫図録、五十一頁。
- (23) 富島義幸「浄瑠璃寺伽藍再考」、『仏教芸術』三二八、二〇二一年、十六―十九頁。
- (24) 靈山寺については左記の文献を参照した。  
・井上正「二七 薬師如来及両脇侍像 靈山寺」、丸尾彰三郎・毛利久・西川新次・井上正・水野敬三郎編『日本彫刻史基礎資料集 平安時代 造像銘記篇』第二卷、中央公論美術出版、一九六七年。  
・田辺聖子「東山圓教『古寺巡礼奈良十二 靈山寺』」、淡交社、一九七九年。  
・難波田徹『日本の美術 第二八四号 鏡像と懸仏』、至文堂、一九九〇年、七五―七八頁。  
・奥健夫「一三八 薬師如来及両脇侍像 靈山寺」、「一四〇 十二神將立像 靈山寺」作品解説、久野健編『仏像集成5 日本 霊山寺(奈良I)』、学生社、一九九三年、二〇八―二〇九頁、二二―二三頁。  
・上野勝久「二〇五 靈山寺本堂」作品解説、山本勉責任編集『日本美術全集第7巻 鎌倉・南北朝時代I 運慶・快慶と中世寺院』、小学館、二〇一三年、二六七頁。
- (25) 前掲注24、奥氏作品解説。同注、田辺・東山氏著書所収の「靈山寺の歴史と信仰」(東山氏執筆、八十五頁)及び「十二神將立像」作品解説(一三二頁)では、より具体的に本堂建立時の制作と述べている。
- (26) 浅見龍介「曹源寺藏 十二神將像」、『国華』第一二八七号、二〇〇三年、三十九―四十頁。
- (27) 奥健夫「曹源寺十二神將像小考」、『MUSEUM』第六六八号、二〇一七年、八十九―九十一頁。

(28) 該当箇所は次の通り。

「爾の時、衆中に十二葉又大將有りて、俱に会坐に在り。所謂る、

宮毘羅大将 伐折羅大将

迷企羅大将 安底羅大将

頰爾羅大将 珊底羅大将

因達羅大将 波夷羅大将

摩虎羅大将 真達羅大将

招杜羅大将 毘羯羅大将

此の十二葉又大將には一一に各七千の葉又有りて、以て眷屬と為す。同時に声を挙げて仏に白して言さく、

「世尊よ、我れ等、今仏の威力を蒙り、世尊、薬師琉璃光如来の名号を聞くことを得たり。復た更に悪趣の怖れ有らず。我れ等、相い率いて皆な同じく心を一にし、乃至尽形まで仏法僧に帰し、誓いて当に一切の有情を荷負し、為に義利・饒益・安楽を作すべし。何等の村城国邑、空闲の林中にも随い、若し此の経を流布し、或いは復た薬師琉璃光如来の名号を受持して恭敬・供養する者有らば、我れ等眷屬、是の人を衛護して、皆な一切の苦難を解脱せしめん。諸有る願求をして悉く満足せしめん。或いは疾厄より度脱するを求むる者有らば、亦た応に此の経を誦誦し、五色の縷を以て我が名字を結び、願の如くなることを得已りて、然して後に結びを解くべし」と。

以上は由木義文・箕輪顕量・西本照真校註『新国訳大藏経 七

浄土部三』、大蔵出版、二〇〇七年、一八四—一八五頁による。

原典は『大正新脩大藏経』十四、四〇八頁 a—b。

(29) 前掲注3、中野氏著書、三十八—四十二頁。

(30) 鄧健吾「敦煌莫高窟第二二〇窟試論」、『仏教芸術』一三三、一九

八〇年、二十三—二十五頁。前掲注3、中野氏著書、三十九頁。ただし剥落が多いため、すべてが十二支獣に対応するかどうかは確認されていない。

(31) 李鎮榮「統一新羅時代の十二神将像——韓国と日本の十二神将像の比較研究の一環として——」、『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三十四、二〇二二年。同「統一新羅の十二神将に関する考察」、『フィロカリア』第三十三号、二〇一六年。

(32) 前掲注3、中野氏著書、二十七頁。川瀬由照『日本の美術 第五一八号 十二支——時と方位の意匠』、ぎょうせい、二〇〇九年、四十一頁。

(33) 「右十二神将頭光。皆八輻輪。共无三本形一(矣)。」(『群書類従』第二十四輯釈家部、五八三頁)

(34) 内藤藤一郎『日本仏教図像史 上巻 薬師如来・阿弥陀如来』、東方書院、一九三二年、九十五頁。前掲注3、中野氏著書、十九—二十頁。

『覚禅鈔』は「薬師法」のうち「十二神将事」の「住所」の項(『大日本仏教全書』五十三、三十一頁 a—b)、『阿婆縛抄』は「薬師」のうち「十二神将」の「十二神将本所居」の項(『大日本仏教全書』五十七、三三二頁 a—b)で『大方等大集経』を引用し、十二獣と十二神将との関係を示唆している。なお『大日本仏教全書』は鈴木学術財団編集刊行本による(以下同じ)。

(35) 『大正新脩大藏経』十三、一六七頁 b—一六八頁 a。

(36) 前掲注3、中野氏著書、二十七頁。前掲注32、川瀬氏著書、十八—十九頁。

(37) 錦織亮介「玄證本薬師十二神将図小考」、『哲学年報』三十二、九州大学文学部、一九七三年、四十六頁。

- (38) 前掲注34、内藤氏著書、八十五頁。
- (39) 前掲注37、錦織氏論文、四十四頁。
- (40) 中野照男氏によると、高野山金剛三昧院所蔵の二十八部衆并十二神将図(『大正新脩大蔵経図像』七所収)の十二神将図が「浄瑠璃浄土標」に基づく唯一の作例と考えられるが、獣座に乗らず、立像で額に十二支をいたたく姿に変更されているとする。前掲注3、中野氏著書、二十一—二十二頁。
- (41) 浄瑠璃寺旧蔵像や室生寺像が代表的な例として知られており、次の論考で論じられている。山本勉・浅見龍介「室生寺金堂十二神将像考」、『MUSEUM』第五七一号、二〇〇一年、六十六—六十八頁。
- (42) 以下、十二神将の形像の成立と展開については、前掲の内藤藤一郎氏、錦織亮介氏、中野照男氏などの研究を参照した。
- (43) 前掲注3、中野氏著書、六十八—六十九頁。
- (44) 野間清六「長勢作 十二神将像」、『国華』第八七四号、一九六五年、二十七頁。前掲注3、中野氏著書、六十九頁。武笠朗「兵庫・東山寺蔵石清水護国寺旧在の大江匡房奉納真快作十二神将像」、『仏教芸術』二〇三、一九九二年、八十一頁。
- (45) 上杉孝良「曹源寺木造十二神将像について」、『三浦古文化』四十七号、一九九〇年、二十一—二十二頁。
- (46) 定智本図像については次の論文を参照した。  
前掲注37、錦織氏論文、四十七—五十二頁。山本勉「宝城坊本堂十二神将像考」、『MUSEUM』第五九四号、二〇〇五年、五十一—五十六頁。
- (47) 『大日本仏教全書』五十三、三十二頁c。
- (48) 前掲注37、錦織氏論文、四十九頁。
- (49) 前掲注6、伊東氏論文、十九頁。
- (50) 前掲注37、錦織氏論文、四十九—五十頁。
- (51) 前掲注6、伊東氏論文、十九頁。
- (52) 前掲注32、川瀬氏著書、四十三頁。
- (53) 「定智本」及び「世流布像」の成立と展開については、次の論文を参照した。  
前掲注37、錦織氏論文、四十七—五十三頁。林温「桜池院蔵薬師十二神将像と薬師如来画像—南都仏画考—」、『仏教芸術』二〇三、一九九二年、二十三—二十五頁、三十二—三十六頁。
- (54) 前掲注3、中野氏著書、六十六—七十頁。
- (55) 例えば奥健夫氏は、曹源寺像の巳神と戌神の図像の祖型が、新薬師寺像の摩虎羅、招杜羅にそれぞれ求められることを指摘している。前掲注27、奥氏論文、八十七頁。
- (56) このことについて、次の論文で論じられている。前掲注41、山本氏・浅見氏論文、六十六頁。  
山口隆介「鎌倉時代前期の十二神将造像と図像」、藤岡穰研究代表者・責任編集『平成十八年度—平成二十年科学研究所費補助金(基盤研究C)研究成果報告書 仏教美術における絵画と彫刻』、二〇〇九年。
- (57) 瀬谷貴之「鎌倉の霊験仏信仰」、加須屋誠編『図像解釈学—権力と他者(仏教美術論集4)』竹林舎、二〇一三年、三八二—三八四頁。同「総論 運慶 鎌倉幕府と霊験伝説—近年の新知見を中心に—」、神奈川県立金沢文庫編『特別展 運慶 鎌倉幕府と霊験伝説』、同館、二〇一八年、十一頁。
- (58) 前掲注57、瀬谷氏論文(二〇一三年)、三八四頁。同注57、瀬谷氏論文(二〇一八年)、十一頁。

- (59) 塩澤寛樹「運慶の実像と現代「運慶像」」、長岡龍作編『機能論——つくる・つかう・つたえる〈仏教美術論集5〉』竹林舎、二〇四年、二八八頁。同『大仏師運慶 工房と発願主そして「写真」とは』、講談社、二〇二〇年、二三八頁。
- (60) 『大日本仏教全書』五十七、三三二頁b—三三三頁b。
- (61) 『大日本仏教全書』五十七、三三三頁b。
- (62) 『大正新脩大藏経図像』四、三〇六頁b—c。
- (63) 『大日本仏教全書』五十三、三十二頁c。
- (64) 『大正新脩大藏経図像』十、五八九頁a—五九〇頁a。
- (65) 『大正新脩大藏経図像』六、四〇〇頁a—c。
- (66) 詳細は各史料を参照のこと。また前掲注3、中野氏著書（二十一—二十六頁）に、主な図像集に掲載されている十二神将の像容が整理されている。
- (67) 前掲注3、中野氏著書、二十頁。
- (68) 『大正新脩大藏経』七十八、八〇三頁c。なお金子啓明氏は、十二神将を密教の分身論に基づき解釈した例として本史料を取り上げた。金子啓明「伝浄瑠璃寺旧蔵の十二神将像について——その図像と造形表現を中心に——」、『MUSEUM』第三五九号、一九八一年、十四頁。
- (69) 『大正新脩大藏経』七十九、一七九頁c。
- (70) 前掲注27、奥氏論文、八十九頁。
- (71) 『大正新脩大藏経図像』六、四〇一頁c。
- (72) 『大正新脩大藏経図像』三、九十三頁a。
- (73) 向坂卓也「総説」、神奈川県立金沢文庫編『特別展 十二神将 修理完成記念特別公開』、同館、二〇一八年。
- (74) 前掲注68、金子氏論文、十四—十六頁。
- (75) 『大正新脩大藏経』七十六、二十二頁a—二十三頁a。
- (76) 『大日本仏教全書』五十七、三三二頁a—三三四頁a。
- (77) 『大正新脩大藏経図像』十、五八八頁c—五九〇頁a。
- (78) 『大正新脩大藏経図像』六、三九九頁a—四〇二頁b。
- (79) 『大正新脩大藏経』十八、七九九頁b—c。
- 『別尊雜記』、『阿婆縛抄』、『白宝抄』における引用箇所は次のとおりである。
- ・『別尊雜記』薬師、成蓮房説（『大正新脩大藏経図像』三、二十九頁a）
  - ・『阿婆縛抄』薬師、功能（『大日本仏教全書』五十七、三三〇頁c）
  - ・『白宝抄』薬師法雜集下、十二神将事（『大正新脩大藏経図像』十、五九〇頁a）
- (80) 『阿婆縛抄』に次のようにある。
- 「右集経薬師瑠璃光仏大陀羅尼也。（中略）世号二十二神将呪。是則薬師真言娑命中加二十二神将也。（云々）」（『大日本仏教全書』五十七、三二六頁c）
- (81) 例えば、前掲注19濱名氏論文、前掲注68金子氏論文など。

【図版出典】

- 図1 水野敬三郎監修『カラー版 日本仏像史』（美術出版社、二〇〇一年）。
- 図2、3 奈良国立博物館編『檀像 白檀仏から日本の木彫仏へ』（同館、一九九一年）。
- 図4 国立文化財機構所蔵品統合検索システム ([https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/nm/C-1852?locale=ja#&gid=null&pid=1](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/nm/C-1852?locale=ja#&gid=null&pid=1))

図5 霊山寺ホームページ (<https://www.ryosenji.jp/eventDetail24.html>)

図6 神奈川県立金沢文庫編『特別展 運慶 鎌倉幕府と霊験伝説』(同館、二〇一八年)。

【付記】

図版の掲載につきましては、各像の御所蔵者の皆様より格別のご高配を賜りました。末筆ながら謹んで御礼申し上げます。

平安・鎌倉期における十二神将の受容と造像



図2 薬師如来坐像 京都・仁和寺



図1 薬師如来坐像  
京都・東寺(教王護国寺)金堂



图4 十二神将立像 巳神像  
東京国立博物館(京都・浄瑠璃寺旧蔵)



图3 薬師如来坐像 京都・勝持寺



图6 十二神将立像 巳神像  
神奈川・曹源寺



图5 薬師三尊像・十二神将立像安置状況  
奈良・靈山寺

表1 鎌倉時代までの十二神将像作例

所在地・所有者	所在地	十二神将像の年代	十二神将像の形式	頂上の十二支の有無	薬師如来像の年代	参考文献・備考
薬師寺	奈良	飛鳥～奈良時代(7世紀末～8世紀前半)	台座に浮彫り	無	飛鳥～奈良時代(7世紀末～8世紀前半)	台座に表される12体の異形像が十二神将である可能性が指摘されている。長岡龍作『日本の仏像』(中央公論新社、2009年)ほか。
新薬師寺	奈良	奈良時代(8世紀)	彫像(独立)	無	奈良～平安時代(8世紀)	十二神将像は岩淵寺からの移築。薬師如来像と当初からの一具ではない。
彌足寺	滋賀	奈良時代(8世紀)	彫像(独立)	無	奈良時代(8世紀)	3體のみ現存。
東寺金堂	京都	平安時代(延暦15年(796))	台座腰部周辺に配したか。	無	平安時代(延暦15年(796))	当初像は現存せず。『東室記』による。
川原寺(弘福寺)	奈良	奈良～平安時代(8世紀末～9世紀後半)	彫像(独立)	無	不明	当初像10體。制作年代は先行研究により諸説ある。8世紀末ごろ：大河内智之「奈良大学文化財学講座 美術資料から見る地域史 ⑦川原寺の十二神将像が語る歴史」、『月刊大和路なら』第26巻第8号通巻299号、2023年。平安前期：鈴木智博「飛鳥および明日香の仏像―「大飛鳥展」よせて―」、同「51十二神将立像」作品解説、奈良県立万葉文化館編集・発行『開館十周年記念特別展 大飛鳥展』、2011年。
勝持寺	京都	平安時代(9世紀)	光背に浮彫	無	平安時代(9世紀)	光背に七仏とともに浮彫り。井上一徳「勝持寺薬師如来樹像について(下)」、同志社大学博物館学芸員養成課程『博物館学年報』47、2016年。現在せず。日光・月光菩薩像は永承7年(1052)頃供養。『左経記』、『山門堂舎記』、『天台座主記』、『院店要記』による。
比叡山根本中堂	滋賀	平安時代(治安2年(1022))	彫像(独立)	無	奈良時代(延暦7年(788))	長勢作。『広隆寺来由記』による。
広隆寺	京都	平安時代(康平7年(1064))	彫像(独立)	無	平安時代(延暦17年(798))	奥健夫「138 薬師如来及面路侍像 霊山寺」、『140 十二神将立像 霊山寺』作品解説(『仏像集成5』)。
霊山寺	奈良	平安時代(治暦2年(1066))	光背に彩画(彫像の日光・月光菩薩像の板光背にあわす)	無	平安時代(治暦2年(1066))	日石清水護国寺伝来。武笠明「兵庫・東山寺藏石清水護国寺田在の大社巨庫奉納具伝作十二神将像」、『仏教芸術』203、1992年。
東山寺	兵庫	平安時代(承徳2年(1098))	彫像(独立)	有	平安時代(9世紀)	日石清水護国寺伝来。武笠明「兵庫・東山寺藏石清水護国寺田在の大社巨庫奉納具伝作十二神将像」、『仏教芸術』203、1992年。
興福寺	奈良	平安時代(11世紀)	板彫り(当初は台座に配されたか)	無	不明	薬師如来像の台座の周間に配された可能性が指摘される。倉田文作「十二神将立像」作品解説、『奈良六六寺大観 第七巻 興福寺一』岩波書店、1969年。夜叉形を含む。
佛勝寺	三重	平安時代(11世紀)	彫像(独立)	有(一部当初)	未確認	夜叉形を含む。寅神将は鎌倉時代(13世紀)の後補の可能性が指摘される。京都国立博物館・東京国立博物館『科学研究所寄贈基金 基礎研究(B) 報告書 多数像より構成される仏教尊像に関する調査研究―図像的典拠と分担製作の視点から―』、東京国立博物館、2016年。
仁和寺	京都	平安時代(康和5年(1103))	台座腰部に浮彫	無	平安時代(康和5年(1103))	円勢・長円作。空海書來像の複製像と伝えられる。伊東史朗「仁和寺 日北院本薬師如来像について」、『仏教芸術』177、1988年。
東大寺	奈良	平安時代(12世紀)	彫像(独立)	有	不明	山本大尊「宝城坊本堂十二神将像考」、『MUSEUM』594、2005年。定智本堂(彫像による古例)。
宝城坊(現本堂安置)	神奈川	平安時代(12世紀)	彫像(独立)	有(後補)	平安時代(10世紀)	山本大尊「宝城坊本堂十二神将像考」、『MUSEUM』594、2005年。定智本堂(彫像による古例)。
願興寺	岐阜	平安時代(12世紀)	彫像(独立)	有	平安時代(12世紀)	澤藤望「406 薬師三尊像 願興寺」、『411 十二神将立像 願興寺』作品解説(『仏像集成』2)
福岡市美術館	福岡	平安時代(12世紀)	彫像(独立)	有(後補)	平安時代(12世紀)	東光院田蔵。中・西・亥神像は後補。薬師如来像、十二神将像とも12世紀の作であるが、作風には開きがあると指摘される。九州歴史資料館編『聖観薬師と東光院の古仏たち』、同館、2018年。

平安・鎌倉期における十二神将の受容と造像

美術史 第四十五号

所在地・所有者	所在地	十二神将像の年代	十二神将像の形式	頭上の十二支の有無	薬師如来像の年代	参考文献・備考
横蔵寺	岐阜	平安時代(12世紀)	彫像(独立)	有	当初像現存せず	参考文獻・備考 一部後補像。齋藤望「379 十二神将立像 横蔵寺」作品解説(『仏像集成』 <sup>2)</sup> )
寛益寺	新潟	平安時代(12世紀)	彫像(独立)	有	平安時代後期	熊田氏によれば、寛益寺周辺地域には12世紀末から13世紀初頭の十二神将作例が数知れぬ。
古保利薬師收藏庫	広島	平安時代末～鎌倉時代(12世紀末)	彫像(独立)	有(5軀に確認)	平安時代(9世紀)	松本真「広島修道大学学術書庫23 古保力の仏像 中国地方の山間・古保力薬師の仏像造形考察、アーツ・アンド・クラフツ」2004年。
中禅寺	長野	平安時代	彫像(独立)	亡失か	平安末～鎌倉時代(12～13世紀)	一軀のみが現存。『日本の美術』381。
曹源寺	神奈川県 初)	鎌倉時代(12世紀末～13世紀初)	彫像(独立)	有	不明(現存せず)	奥健夫「曹源寺十二神将像小考」、『MUSEUM』668、2017年。
環伽寺	山梨	鎌倉時代(12世紀末～13世紀初)	彫像(独立)	有	平安時代(10世紀)	鈴木麻里子「山梨・環伽寺十二神将像について」、『仏教芸術』253、2000年。
杉之森高畑氏子	新潟	鎌倉時代(13世紀)	彫像(独立)	不明	鎌倉時代(13世紀)	水野敬三郎・長嶋圭哉・松久國彦編「中越大震災復興折念特別展 新潟の仏像展」、新潟の仏像展実行委員会、2006年。
興福寺東金堂	奈良	鎌倉時代(建永2年〔1207〕)	彫像(独立)	有	天武天皇14年(685)	副島弘道「55 十二神将像 興福寺」作品解説、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第2巻(解説)』、中央公論美術出版、2004年。薬師如来像は旧山田寺像、文治3年(1187)に興福寺へ移送。
大善寺	山梨	鎌倉時代(嘉禄3年〔1227〕)	彫像(独立)	有	不明	鈴木麻里子「大善寺日光・月光菩薩像及び十二神将像について」、羽中田壯雄先生喜寿記念論文集刊行会編『甲斐の美術・建造物・城郭』岩田書院、2002年。
淨瑠璃寺旧藏	京都	鎌倉時代(安貞2年〔1228〕頃)	彫像(独立)	有	平安時代後期(11世紀)	奥健夫「111 十二神将像 大善寺」解説、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第4巻(解説)』、中央公論美術出版、2004年。
法界寺	京都	鎌倉時代(13世紀)	彫像(独立)	有	平安時代後期(永承6年〔1051〕頃)	現在東京国立博物館、静嘉堂文庫美術館に所蔵。
淨妙寺	和歌山	鎌倉時代(13世紀)	彫像(独立)	有	鎌倉時代(13世紀)	長田寛康「434 十二神将立像 淨妙寺」、『435 薬師如来及面壁侍像 淨妙寺』解説(『仏像集成』7)
辻薬師堂旧藏	神奈川県	鎌倉時代(13世紀)	彫像(独立)	有	平安時代後期(12世紀)	現在鎌倉国宝館所蔵。8軀が当初像。山口隆介「薬師三尊及び十二神将立像」作品解説、鎌倉国宝館編『旧辻薬師堂諸像修理完成記念 特別展 薬師如来と十二神将～いやしのまはとけたら～』、同館、2010年。
大善寺旧藏	神奈川県	鎌倉時代(13世紀)	彫像(独立)	有	鎌倉時代(13世紀)	現在奈良国立博物館所蔵。亥神のみ江戸時代(17～18世紀)。岩井共二「50 十二神将立像」作品解説、奈良国立博物館編『特別展 武家のみやこ 鎌倉の仏像 追真とエキゾシズム』、奈良国立博物館・読売新聞社、2014年。
陸奥国分寺	宮城	鎌倉時代(13世紀)	彫像(独立)	有(後補。当初の有無は不明)	不明(当初像現存せず)	酒井昌一郎「陸奥国分寺の不助明王・思沙門天・十二神将」『仙台市博物館調査研究報告』23、2003年。
宝生寺	奈良	鎌倉時代(13世紀)	彫像(独立)	有	不明	造像当初の伝来不詳。宝生村祇取の小堂から移入されたとの伝えもある。田中義泰「十二神将立像 山本堂所在」、『大和古寺大観 第六卷 宝生寺』、岩波書店、1976年。山本勉・浅見龍介「宝生寺金堂十二神将像考」、『MUSEUM』571、2001年。
瀧山寺	愛知	鎌倉時代(13世紀)	彫像(独立)	有(多くが亡失)	不明	「木造日光月光菩薩立像 二軀 木造十二神将立像 十二軀」解説、『月刊文化財』1月号(712号)、2023年。



所在地・所有者	所在地	十二神将像の年代	十二神将像の形式	頭上の十二支の有無	薬師如来像の年代	参考文献・備考
浄土寺	愛知	鎌倉時代(正嘉元年〔1257])	彫像(独立)	有	平安時代後期	副島弘道・山岸公基「231 十二神将像 浄土寺」解説、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第9巻(解説)』、中央公論美術出版、2013年。
東光寺	山梨	鎌倉時代(弘長2年〔1262])	彫像(独立)	有	鎌倉時代(12世紀末～13世紀初)	当初像は6軀、木野敬三郎「254 東光寺 十二神将像」解説、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第9巻(解説)』、中央公論美術出版、2013年。
瑞穂寺	兵庫	鎌倉時代(13世紀・文永8年〔1271]頃か)	彫像(独立)	有	当初像現存せず	8軀が現存。文永8年銘の日光・月光菩薩立像と一具の作か。武覚明「309 日光菩薩・月光菩薩像」解説、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第11巻(解説)』、中央公論美術出版、2015年。
善水寺	滋賀	鎌倉時代(文永9年〔1272])	彫像(独立)	有(一部当初)	不明	伝来の詳細や、善水寺の像として造立されたかは不明とされる。佐々木進・松岡久美子「311 十二神将像 善水寺」、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第11巻(解説)』、中央公論美術出版、2015年。
雪隠寺／竹林寺	高知	鎌倉時代(文永11年〔1274]～建治2年〔1276])	彫像(独立)	有(一部亡失)	鎌倉時代(13世紀前半)	奥健夫「318 十二神将像 雪隠寺／竹林寺」、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第12巻(解説)』、中央公論美術出版、2016年。
明通寺	福井	鎌倉時代(13世紀後半)	彫像(独立)	有	平安時代(11世紀)	濱田沙矢佳「福井・明通寺の十二神将立像について」、『美術史学』42、2021年。
桑原薬師堂旧蔵	静岡	鎌倉～室町時代 ・13世紀前半(伝丑神) ・建治3年(1277)頃(伝卯神、伝辰神、伝申神、伝亥神) ・14世紀初め頃(伝子神・寅神・巳神・午神・酉神・戌神) ・15～16世紀頃(伝未神)	彫像(独立)	有	平安時代後期	現かんなみの里美術館所蔵。山本勉「345 十二神将像 かんなみの里美術館」解説、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第12巻(解説)』、中央公論美術出版、2016年。
東明寺	千葉	鎌倉時代(13世紀中頃～後半)	彫像(独立)	有	平安時代(12世紀)	濱名徳順「富津市東明寺十二神将像と北条義時の支那霊験譚」、『アジア民族造形学会誌』18、2022年。
医王寺	栃木	鎌倉時代(13世紀後半)	彫像(独立)	有(一部)	鎌倉時代(13世紀後半)	萩原哉「1 薬師如来及び河原侍像」作品解説、大澤慶子「2 十二神将立像」作品解説(宗教学人医王寺編集・発行『東高野山医王寺金堂平成14年修復履歴記念 医王寺の仏像』、2012年)
瀧水寺	千葉	鎌倉時代(13世紀後半)	彫像(独立)	有	不明	武空明「394 瀧水寺 十二神将像」解説、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第14巻(解説)』、中央公論美術出版、2018年。
仏生寺	栃木	鎌倉時代(13世紀後半)	彫像(独立)	有(後補または亡失)	平安時代(12世紀初)	北口英雄「資料紹介 仏生寺蔵 木造十二神将立像」、栃木県立博物館編「栃木県立博物館研究紀要 人文』24、2007年
小松寺	千葉	鎌倉時代(13世紀後半)	彫像(独立)	一部有(後補か?)	秘仏本尊：平安時代(9世紀)前立像；平安時代(12世紀)	2 薬師如来立像「11 薬師如来立像」12 十二神将立像「作品解説(いすれも濱名徳順執筆)・千葉市美術館編『仏像半島一房蔵の美しき仏たち』、千葉市美術館・美術館連綿協議会、2013年。
霊山寺	奈良	鎌倉時代(13世紀後半)	彫像(独立)	有	平安時代(治暦2年〔1066])	奥健夫「138 薬師如来及河原侍像」140 十二神将立像 霊山寺」作品解説(14像集成51)。日光・月光菩薩像の釈光背にも絵画で十二神将像を表す。
西蓮寺	茨城	鎌倉時代(13～14世紀)	彫像(独立)	有	平安時代後期	柳原治美「52 十二神将立像」作品解説、茨城県立歴史館編集・発行『開館三十周年記念特別展 I 茨城の仏教遺宝一みほとけの情景とまなざし』、2004年。

平安・鎌倉期における十二神将の受容と造像

美術史学 第四十五号

所在地・所有者	所在地	十二神将像の年代	十二神将像の形式	頭上の十二支の有無	薬師如来像の年代	参考文献・備考
本山慈恩寺	山形	鎌倉時代 (13～14世紀)	彫像 (独立)	有 (一部後補)	鎌倉時代 (延慶3年 (1310))	当初像8軀。制作年代は先行研究により諸説ある。13世紀：根立研介「山形・本山慈恩寺の木造十二神将立像」[MUSEUM] 480, 1991年。など。14世紀：奥健夫「曹源寺十二神将像小考」[MUSEUM] 668, 2017年 (薬師如来像と同時期の作とする) 宮本忠雄「309 十二神将立像 竜王寺」作品解説 [仏像集成] 4)
龍王寺	滋賀	鎌倉時代 (13～14世紀) 鎌倉時代 (13～14世紀) 子・巳：鎌倉前期 午・未：鎌倉中・後期 丑・寅・卯・辰・申・酉：鎌倉末～南北朝 戌・亥：室町以後	彫像 (独立)	有	平安時代後期	当初像は4軀。向坂卓也「コラム 城ヶ島薬師堂と見極寺の十二神将像」、神奈川県立金沢文庫編『特別展 十二神将—守護神集結—』、同館、2004年。
法隆寺西門堂	奈良		彫像 (独立)	有	奈良時代 (8世紀後半)	副島弘道「84 薬師如来坐像 法隆寺 (西門堂)」[143 十二神将立像 法隆寺 (西門堂)] 作品解説 [仏像集成] 6)。
見極寺 (旧城ヶ島薬師堂伝来)	神奈川県	鎌倉時代 (13～14世紀)	彫像 (独立)	有	平安時代後期	当初像は4軀。向坂卓也「コラム 城ヶ島薬師堂と見極寺の十二神将像」、神奈川県立金沢文庫編『特別展 十二神将—守護神集結—』、同館、2004年。
個人 (京都国立博物館寄託)	—	鎌倉時代 (13～14世紀)	板彫	有?	不明	伝来不詳。現在個人に分蔵される。山本勉氏は、薬師如来像の台座に貼られたものであったかとの推定を示している。山本勉「宝城坊本堂十二神将像考」[MUSEUM] 594, 2005年。京都国立博物館・東京国立博物館編『科学研究費補助金 基礎研究 (B) 報告書 多数集より構成される仏教尊像に関する調査研究—図像的典拠と分担製作の視点から—』、東京国立博物館、2016年。
大興寺	京都	鎌倉時代 (正和4年 (1315)) (巳・午神将像)	彫像 (独立)	有 (後補)	未確認	当初像は左記の2軀。伊東史朗「芝薬師 (大興寺) の十二神将巳神将午神将像—鎌倉時代末院派仏師の一活動—」[仏教芸術] 323, 2012年。
黒石寺	岩手	鎌倉時代 (14世紀)	彫像 (独立)	有 (亥、未、巳が現存)	平安時代 (貞観4年 (862))	田中恵「604 十二神将像 黒石寺」作品解説 [仏像集成] 1)。
宝城坊 (現収蔵庫安置)	神奈川県	鎌倉時代 (14世紀)	彫像 (独立)	有	鎌倉時代 (13世紀前半)	山口隆介「14 十二神将立像」作品解説、鎌倉国宝館編『田辻薬師堂諸像修復完成記念 特別展 薬師如来と十二神将—いやしのみほとけたち—』、同館、2010年。山口氏は、同寺の周天六薬師如来坐像に随侍して制作された可能性を指摘している。
萬福寺 (大寺薬師)	高根	鎌倉時代 (14世紀)	彫像 (独立)	有	平安時代 (10世紀)	出雲市文化財課作成「大寺薬師の仏像」パンフレット、2016年。
薬王院	茨城	鎌倉～南北朝時代 (14世紀)	彫像 (独立)	一部有 (後補か?)	平安時代後期 (11～12世紀前半)	後藤道雄「422 薬師如来坐像 薬王院」[423 十二神将立像 薬王院] 作品解説 [仏像集成] 1)



## Summary

# Acceptance and creation of statues of the Twelve Divine Generals in the Heian and Kamakura Periods

Sayaka HAMADA

This paper focuses on the increase in the number of statues of the Twelve Divine Generals in Japan from the late Heian Period, and examines the aspects of the acceptance and creation of statues of the Twelve Divine Generals from the Heian Period to the Kamakura Period.

This section examines examples of new Twelve Divine Generals statues that were added to older Yakushi Nyorai statues after the late Heian Period. These examples indicate that the Twelve Divine Generals received renewed attention during this period. The hope placed in the Twelve Divine Generals is motivated by faith in the venerable old Yakushi Nyorai statues. In order to form a relationship with and receive the blessings of Yakushi Nyorai, new statues of the Twelve Divine Generals, who are followers of the Yakushi Nyorai, were created and enshrined. The Twelve Divine Generals were thought to protect and mediate the prayers of worshippers of Yakushi Nyorai. Based on the faith in Yakushi Nyorai, interest in the Twelve Divine Generals as mediators between Yakushi Nyorai and humans began to grow.

Buddhist scriptures do not clearly describe the roles and appearances of the Twelve Divine Generals. However, as interest in the Twelve Divine Generals grew from the late Heian Period to the Kamakura Period, their appearances and personalities began to be defined in detail in iconographic collections.

It is believed that the abovementioned factors led to the proliferation of statues of the Twelve Divine Generals in the Middle Ages.